改正月令博物筌

冬之部

十月部目録

△印ハ俳偕の季をとり物あり

○養生の法。○雨風の考。○米の豊凶。○妙藥其外人家重宝の事ハ取々ふれる也目録にハしるさず

發端 冬の由來 冬の異名 一丁
十月 卦 月支 陰陽生 謝子 異名 二丁
△立冬節 十三丁
△小雪節ヨリ十六日メ 十三丁
十月日令 此部ハ十月日の定りたる事を集めたるなり
孟冬の旬 十四丁
△更衣 十四丁
朔日 衣服の式 十四丁
朔日 △拝墳 十四丁
朔日 △進炉炭 十四丁
朔日 △爐燭會 十四丁
朔日 △炉開 △爐炉會 △炉開會 十四丁
△神送 △神の旅 △神の留守 十五丁
亥日 △御玄猪 △玄猪餅 △亥の子 ○能勢餅 △御嚴重 十五丁
五日 △達磨忌 十五丁
△残菊宴 十六丁
△十夜 十六丁
六日 △大和興福寺法花會 十六丁

十月

△讃州金毘羅祭（十日）
△南都維摩會（十日）
△芭蕉忌（十二日）
△御命講 △法華會式（十三日）
△水官解厄（中亥）
△下元（十五日）
△出雲大社神事 △神あつめ △神あり（中亥）
△京都聖一國師忌（十六日）
△恵比須講 △誓文拂（十九日）
△京法勝寺大衆會（十九日）
△梅尾[illegible]着（二十八日）
△神迎（晦日）

十月令

此部ハ八日の定まらさる十月一ヶ月の事をあつむ

△御取越
△茶の口切 △口切
△巨燵明 △巨燵切る

十月時令

此部ハ十月の時候にかゝる事をあつむ

△初冬
△初霜 △初霜きゆる
△時雨 △初しぐれ △川音時雨 △小夜時雨 △袖しぐれ △村しぐれ △北しぐれ
△片しぐれ △涙しぐれ △夕しぐれ △松風しぐれ △落葉しぐれ
△[illegible]
△木枯
△初雪 △初雪きゆる △初雪の見参
△初氷 △初氷解
△冬ざれ
△冬籠
△冬構
△閉北窓

草木

此部ハ十月の草木を集めたるを

△名草枯 △萩かるゝ △葛かるゝ △蘭かるゝ △蘆かるゝ △荻かるゝ △芭蕉かるゝ △薄かるゝ
△冬椿
△早咲椿
△残菊
△冬牡丹 △寒牡丹
△石蕗花
△冬菊 △寒菊
△水仙花
△八手花
△茶の花
△山茶花
△帰花 △かへり咲 △わすれ咲
△寒梅
△枇杷花
△室の梅 △室咲
△榧の花
△散紅葉 △紅葉散る

△麥蒔　△枯蘆
△枯柳　△落葉
木の葉　△木の葉　△木葉ふる　△木葉の雨　△木葉時雨
△朽葉　△蕪
△大根　△大根引　△おほね　△冬木の櫻
△雪の下　△柊の花
生類
是は十月の鳥けだもの蟲魚のるいをあつめあるなり
△鶯子啼
必用
此部ハ十月一ヶ月の天氣乃見ゆる其外必用の事をのせ
破軍剣方　日刻
出行作事　樂事
天氣　占候
養生　衣服式
生花式　料理献立
終

月令博物筌冬の部發端

此き内に書るハ冬の氣の旺ずる所を月令に曰天氣上り騰り地氣下り降る天地通ぜず閉塞して冬となるといへり註に天氣上り騰り地氣下り降るハ天地おのおの其位を正しうするをいふて猶委しきことハ鳥至といへる所にあるべし

冬由來 釋名に曰冬ハ終也萬物終に成る所なりと有これハ冬ハ一年の終にてよろづの物成就するといふ事也。和語に冬をふゆと訓せしハひゆといふ事にてふとひと五音相通ずるなり

冬爲王 方ハ北とハ易の統圖に曰冬ハ北方の黒道を行

これを北陸といふと有よりて北を
冬の方とするなり。味ハ鹹をつかさ
どる事ハ冬その氣水に屬するゆへ
海水の塩からきを味とするなり。色を
黒しとハ月令ニ天子玄堂の左介ニ
居り玄路にのり鐵驪に駕し
玄旂を載黒衣をきると有て
玄堂ハ北の方の堂をいふ玄路ハ
黒き車鐵驪ハくろむまれ車玄
旂ハくろきはたの事にてことごとく
黒色を主とするをいふ。臟ハ腎
と人の五臟の内にて腎ハ水を主
どる臓なるゆへ冬に配當するなり
氣ハ精とハ腎精をいふなり。卦ハ坎
とハ坎ハ水の象なるゆへなり。星ハ辰
とハ辰星北にあるなり。人ハ智
とハ腎ハ閉藏の官にて人の智
惠をかくす臟なるゆへ智は冬に
當るなり。神ハ玄武といふこれも黒
きかたちを以て冬の神とするなり

冬異名

○玄英 ○顓頊 ○玄冥 ○上天
○清冬 ○三冬 ○九冬

(和名)○こるつゆ ○みふゆ ○きなつけ

異名註

○玄英といふハ爾雅に出
爾雅の註に曰氣黒く
して清英なるといへり。○顓頊と
禮記に其帝ハ顓頊と有。玄冥ハ
これも禮記に其神ハ玄冥と有。
上天とハ禮記に天氣上騰すと
有をいふ。三冬ハ東方朔の疏に出
る字にて冬三月の事をいふ。
九冬ハ先帝纂要に冬を玄冬九冬と
といふ。清冬ハ皮日休が詩に冬を
清冬と作れり。こるつゆハ八雲の
御鈔に出て雪氷なども露のこ
ほるよりなれるものなれバ冬を
こるつゆといふなり。みふゆハ
拾遺集に出て三冬をつきてし
きぬればとよみて漢土に三冬
といふに同じ心なり

哥 秘蔵 きさつけ 小野峯雄
きさつけとながむる末ハ八重霜に
立田の山もさらぬもなく(に)

夫木 為相
浪ゆるき入江の南まつかく
船日れそぞ冬のかげなき

㊕冬籠まおしむ樣也 支考

ゆきたけつ ○冬の朝の事也

㊒ 蔵王集
ゆきつまおきてつえされバ白雪乃
庭もさくらに残るけるのれ

しらふぶき ○冬を主る神也春の神を佐保姫といひ
夏の神をつく姫といひ秋を龍田姫
といふいづれも童蒙抄に出たり春
秋ハ俳の季に用るゆゑを示に委
しく註し給ふども神祇おらび四季
の氣を主る造化の神にて仮に名付たるを
○右の外三冬にまたる季節れ
りのハ別に三冬の部有

十月の部 △印と記し分ハ季をもつ物也

其至ふ生じる一陰の上に月を
にまた一陰づゝ
ふやして十月
は六陰となり
て純陰の月也

○調子ハ律にして應鐘といふ六水
の成長しる也ト禮記月令ニ出應
陽に應ずるなり鐘ハ動くと
いふ心にて萬物動きうみもく
○卦ハ地坤と八上の圖にてく 坤
陰にて地のかたちく

十月異名 じふぐわつのいみやう
○陽月 ○良月 △孟冬 △上冬 ○開冬 ○玄冬
○秦正 ○小春 △神冬
和名 △神無月 神なう月 △かみさり月
△しぐれ月 ○上冬 △初冬月
△初霜月 △小六月 △こはる

十月異名

異名註。陽月とハ此月一陽をもつてきざすをいふ事爾雅に出たり。良月ハ左傳に出たり十は數の滿る事を良といふより左傳の注に見えたり。孟冬ハ月令に出はじめの冬といふ義也。上冬ハ纂要に出これもはじめの冬といふ事也。開冬とハ顔延之の詩に作れり冬のひらくといふ事也。玄冬これも纂要に出てはじめ冬也。秦正ハ歲時記に出秦の世の正月にあたる月といふ心也。小春ハ事文類聚に十月あたゝかにして春のごときといふとあり。上無といふハ陰陽の數が下より九までにて十より上の數なしよつて此月上無といふ。神無月といふハ此月神々出雲國に集るゆゑ故名つく出雲にてハ神有月といふ又一說に此月の異名上無といふをより俗誤つて神無月といふとも

。又真淵の說にハ此月雷聲を出さゞるゆゑ雷無月といふともいへり

。此月伊弉冊尊崩じ給ふ月ゆゑ名つくと世間問答に出たり

。貝原氏の說にハ卦にあてゝハ坤として純陰にあれバ陽未復陽なきの月也神ハ陽の司也此月陽なきの月ゆゑ神無月といへり諸神出雲にあつまり給ふなどいへるも跡かたなき事とあり其外說多し委しく日本歲時記にあるべし然れども風雅の道にハ此論に不拘神なき心をよむが風情ありてよし次に證哥を出し作例と次

(哥) 秘藏　神なき月　菅原忠音

「よそとやまかゝれぬるよなりふなり志ぐれひまなき神なき月

莫傳　神さる月

「雪こそる松の葉ごとに此れおるゝハ神さり月と何かいふらまし

千載　神無月　道因法師

あらし吹ひらのたかねの嶺わたしに
あはれ時雨る神無月かな

新古今　神無月　高光

神無月風に紅葉のちる時ハ
そこはかとなくものぞかなしき

㊕神無月鞴(まふ)の口に木の葉かな　野水

十月ハ小僧の不性見へにけり　支考

神無月髪垂人へおさむいなの園　十
埴石うんやたしらまるれ神無月　支考

㊖　藏王　志ぐれ月

ちりもてしこのその渡のしぐれ月
冬それとじめ何をそわまし

同　[illegible]月

草も木も初霜月の打ほらけ
ながめも白きけさのそらかな

㊕鶺鴒(せきれい)の尾さやすまる小春かな　后女
障子日もぬくもつ小春かな　人男

立冬

○節の名也○七十二候○艸木七十二候
昼夜長短○日の出入左に記次

十月の節を立冬といふハ冬れとはじめの節なればなり

○此頃水始て氷る○木の葉落散つくる也○地始て氷とハはじめてこほれ水が氷るまでそれよりだんだん地もいてるといふ事也○芳艸爲薪とハかれしだれになるをいふ○雉入大水爲蜃(きじおほみづに入ておほはまぐりとなる)よきふるひの有し秋草もかれく

月令の注に蜃(しん)ハ蛟(こうりう)のるいにてこれをこぶりのもひそまりのふるものなるといふ心也とぞ○苫枯(くけ)ハ草木ばかりまわらざ苦までが枯るといふ事也

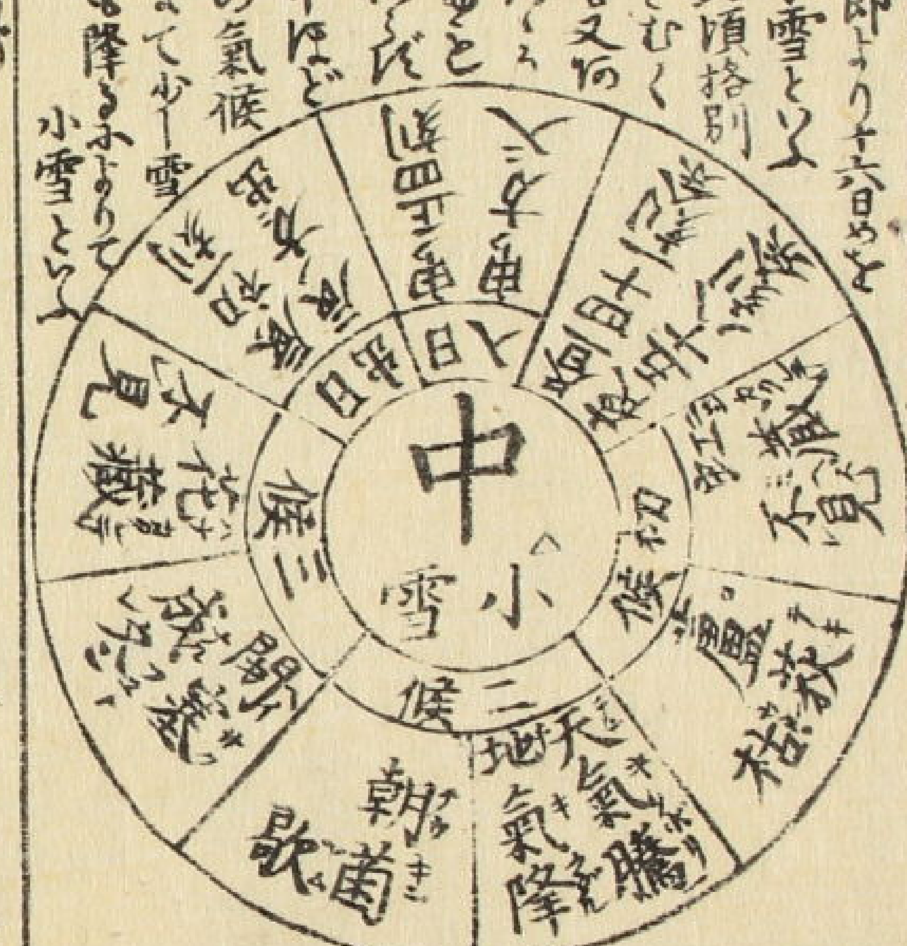
㊖千載　さまざまの草ぞもとハまねがれぬ神ぞうらみやまてきねらん

節の占候、立冬の日雨ふれば来年麦貴し田耕宜からず

壬子なれば来年大ニ熟し節の日晴れば来春雨多し北風あれば六畜にわざはひあり

△小雪。中の名。七十二候。艸木七十二候 日出入昼夜長短の左に記し

節より十六日めを小雪といふ 此頃格別さむく又雨もたゝぬあとふらば中ほどの氣候まて少し雪も降るゆへ小雪といふ



○虹蔵不見ハ此頃より来三月まで虹あらはるゝことなきをいふ。○茸荻枯ハあしおぎ枯るゝ。○天氣騰地氣降とハ天の陽氣去りて地の陰氣下る也寒氣ぜんぐにりよふをとく。○朝菌歇ハきのこはびこりをせざるなり。閉塞成冬とそ

陽氣ふさがりて寒き冬となるなり。○花蔵不見ハ花ハ大抵陽氣を得てひらくものゆへ陽氣なき時なれば花かくれて不見なり

日令

此部ハ八日の定まる事并ニ其の定まる事を出し

朔日 ○今日沐浴をなし長寿なる ○今日房事を禁ずべし

朔日 △孟冬の旬 今日天子御装束を改めらるゝ南殿に出御なりて節會行ひて二献の後氷魚を群臣に給ふ（公事根元ニ出）

（哥）元弘立后屏風 流れる所代の貢とよりひまなく大宮人にくばるなり

（俳）網代木にかゝりや袖の袂 世有

朔日 △更衣 十月朔日ハ先づ御衣をかへらる掃部寮夏の御装束を撤して冬のに改めらる。○天皇南殿に出御ありて節會行はる是を孟

冬の旬くらふ。衣更くばかりて事足月冬

(俳) はなをまた袖と成けり更衣　李下

朔日 衣服の式 諸家今日より来年三月晦日迄冬の袍を着せらる 江家次第に出

朔日 △手墳 唐土にて今日貴賤ともに先祖の墳を拝し祭をなす 貢原説にも本朝にても今日先祖を祭るべしといへり 唐日本の祭り委し 歳時記出

朔日 △進爐炭 唐にハ今日有司爐并燧炭を奉るよし 事文類聚に出

朔日 △食爐燖 ○唐人十月朔日多く蒸餅を作て節物とし 是の人多く爐燖を食ひ或ハ糖と為 事文類聚に出 爐燖とハ酒の浮のこかしたるやうな物 又爐燖の事を蒸裏とも云ふ蒸裏といふてむしたる物とせ

朔日 △爐開 △燧炉會 △炉開會 今日炉を開き三月卅日炉をふさぐ 唐にて今日炉を開き炉中にて肉をやきて飲食し是をたんろ會といふ 歳時雑記出

此例より本朝茶人此日より炉を開き賓客と茶を喫す (詩)有 歳時記に出

△神送 △神の旅 △神の留守 此日諸神出雲の大社へ臨幸したまふといへり委しく日本歳時記に出たり面白き事也みるべし

(俳) 留守の間にあれたる神の落葉かな　野水

かつらきの神ハ宿涼き旅出かな　蘇守

(狂) 馬なくて風をバ神のかしま立木の葉さハぐ音をひて行　真魚

亥日 △御玄猪 △玄猪餅 △御厳重 △亥の子 △能勢餅

昔ハ山猪を奉る事 日本記等に出

○應神天皇の御代より毎歳亥の月亥の日を祝ひたまひ御玄猪の餅を奉るべき詔ありて摂州能勢郡木代村切畑村両村より貢とし○餅を製する当家ハ能く清め赤小豆と餅米とまぜて餅としきくの花かえで

ちのぶの花葉をかいしきとし色
ら寸赤しこれハ家の子れ肉に
表しうるゝ下學集ニ曰亥ハ婬
年十二子を生む閏年ニハ十三子を
生む故ニ婦人これを祝ふといへり
されバ童謡ニ亥の子のもちハ親らめ
子うめといふハ此故なるべし○十月亥の
日ニ餅をくへバ無病長生なり朝齢
其外委しくハ歳時記拾遺ニ出す
女の祝すけなど甚面白し見るべし

(哥)蜻蛉日記「万代をいはふ山路の
いのこより君がつかふるよをひるらし

(俳)猪の菊もるのふつくまぢ孫　立甫
「今朝おけし亥猪の上のかちなり　時風

(狂)猪喰とよそよがれふきとりしが
さそもいのこの腹れ恩ごく　貞松

上巳　今日槐の実を食すれバ百病を去る

四不成日　就日　今日房事を慎べし

五日
△達磨忌(だるまき)　達磨ハ南天竺の人也蘆の葉ニ乗てわたりしとなり

禅宗を弘む大和十九年十月五日
寂す委しくハ博物筌ニ出す

(俳)禅寺に達磨忌して猶侍る者　寛人
達磨忌や落葉ふふる東山道　李破

(狂)小座敷のかべにかけたる絵のだるま
まうかへりてきぬさ寺うる　貞卿

△残菊宴(ざんぎくのえん)　延喜の御代十月残菊
の宴をもよほしたまふ

(哥)秋さける菊にはおれど神無月
附なきはなのうとハうつりける　貫之

(連)くれないの落葉も菊の匂ひかな　昌休

(俳)香んで延くおるよひや菊の露　嵐雪

(狂)秋をよこ給どつらまぐてくと
むれうしまうれ残菊の宴　秀貞

△十夜(じふや)　此月五日より十五日まで浄土宗
の諸寺にて會式を勤むるなり

(俳)はな露の香こめて薫る十夜かな　白羽
「いろまかに吉田ハ吉田十夜かな　麥里

(狂)ふりんくとかねさたけど倉むきる
百万遍の顔の仏不さハ　松子

六日 大和 興福寺法華會　一名山階寺といふ九月晦日より十月六日まで妙法の大會をもよふしむ此大會ハ閑院冬嗣公初めハ六日ハ冬嗣公ハ父長岡大臣の御忌日にあたる也其後行ハるゝや

十日 讃州 金毘羅祭　讃州鵜足郡象頭山に神代より御鎮座ある神之御神事ハ八月晦日より初まり十月十日終る今日参詣別して多し故に李さられ○金毘羅道中記といへる本あり此本ハ金毘羅参詣海陸の道中を委く記ス又金毘羅御利生縁起哥等まで委しくのせり

十日 南都 維摩會　南都興福寺にて十日より十六日迄行ハるゝ

哥 白川殿七百首　新大納言顯輔
神無月時雨ふりおける法とて
あさひ郡にのこる玄乃菊

俳 維摩會やいぬゐの秋りのむし　尾霜

十二日 芭蕉忌　俗姓松尾氏初の名ハ半七後に忠右衛門宗房と改俳諧を季吟に學び桃青といふ江戸深川の庵に芭蕉一株を植しより是によつて世の人芭蕉の翁とよべり元俳諧中興の祖なり

十三日 御命講　△法花會式ともいふ日蓮上人今日寂し給ふ故に法花宗寺院におゐて御影供を修せらる○みえくどめかしと云俗に御の字をそへておめいかうといふなり

俳 頭よりも花のちる也會式哉　雨考

十五日 △下元　今日を下元といふ七月十五日中元の頭にしるし

十五日 △水官解厄　今日水官人間に降て人の善悪を定る也天帝に奏ス

中亥 出雲 △大社神事　△神あつめ△神あり　出雲國杵築村にて行ハる祭神大己貴尊之祭の當日前よりハ毎年風烈く波あらき日なり

其日龍蛇藻に乗て海上に浮ひ来るを取て曲物に盛て神殿に納むといへり其蛇蝮蛇に似て銭形の斑文あり尾先ハ魚に似てまくなし

十六日 △京東福寺の開山 聖一國師忌 建仁二年十月十五日生る弘安三年今日寂ス

俳 通天の紅葉や開山忌 之白

十八日 此日雞初てなく時湯あむれバ長寿無病なり

廿日 不成就日 ○今日遠方へ出る事を忌む ○天龍寺佛國国師の忌日

廿日 △恵比須講 △誓文拂 此日商家に親類をまねきて夷を祭り酒宴を催して客をもてなす殊に京の呉服店ハ格別にぎはしくする事也商人つねに売買の罪を拂ふとて誓文拂といふもの也京にて冠者社に詣で是を誓文がへしの社といふ大坂にハ今宮の戎へ参詣多し

俳 夷講酢売に袴着せにけり 芭蕉
十月の廿日もうるさと怪女るな 巴桃

廿五日 ○今日人の病をとふ事なかれ ○南禪寺の一山忌 行状ハ博物筌にくハし

廿五日 京法勝寺大衆會 ○應仁の頃寺絶て今ハ本尊薬師佛ハ東坂下西教寺にあり

廿八日 不成就日 △栂尾虫供養 栂尾寺ハ明恵上人の開基也

晦日 △神迎 俳 石清水ふ雲ちらつくと神迎 朝聲
稲荷の下拂ひあり神迎 暮酉

月令

日ふくまるべし十月一ヶ月の雑事をしるす

△御取越 十月廿八日親鸞上人御忌日也正當日にハ本願寺にて報恩講を修し一向宗の檀家に報恩講を勤むるハ當月取越て勤る故名づく

△茶の場 △口切 三月に茶を摘五六月に壺へ詰てあたご山へ上し八九月に諸国へ出し十月に八茶人茶壺の口を開く故口切といふ

(俳)口切に堺の庭ぞなつかしき 芭蕉

口切や袴のひざふむ綿薔薇萄 其角

(狂)口切の茶をまあつぎて猿むかし むかしくのむかしちやくむちや 芳室

△巨燵明(こたつあける) △巨燵切る○巨燵ひらく いへバ三冬にわたるなり

時令

此部は八十月の時候にかゝる事をあつむ

△初冬

十月三五日までをいふ又十月の異名にもちひ十月朔一日は事をといふなり

(哥)夫木

おきそでハこよひぞ初夜いつのまに めづらしく袖のさえわたるらん 隆源

類題 初冬霰

おとやまさよりぞ山は冬やいろぐらん 正木のかづらちりきちるなり 範宗

家集 山家初冬

おとぎぬとこのもかさそふ山風に しぐれがちなる庭ぞさびしき 俊光

(詞)冬めきぬる。まだ冬がれぬ。冬されの初冬。冬ちかしきざす。冬の来て ○きのふにかはる風○水○ことしりて ○冬をむかふる。今朝よりふゆと ○きのふを秋と○けふを冬とや ○緑もまれとなる○みどりもまれぬ

△初霜(はつしも)

△初霜おきける○霜のはじめ 委しく冬の上下に記れ

(哥)冬来てきえびもとせぬ袖の霜の とてれハ荒れ風をよまぐく 家衡

(連)初霜の花もかつかし八重の紀 宗祇

(俳)初霜や取ふ籠の夜ごもり 支考

(狂)初霜のきえぬるとても朝食の 箸をおく間の程ぞ消にけり 立甫

△時雨(しぐれ)

△初時雨○しぐれの雨にて季になるまけ次の秋の方 △卯

ありこしぐれハまぐれふるれなり 時の雨とくハ所くふるの意なり 時ぐハよらくみちよろくの義なり ○初時雨とハ十月になりてはじめて

なが月のすゑつかたふるハ秋のしぐれといひて初しぐれとハいはず。

霢雨とかくハ小雨の義にてあそゝぎしぐれともよむるなるべし

（哥）拾遺　かきくらし時雨るゝ空をながめつゝ思ひこそやれかみなびの森　貫之

千載　〔冬〕ねざめして誰かきくらんこのごろの木の葉にかゝる夜半の時雨を　馬内侍

夫木　〔神〕神無月時雨さそへるあらしにもむらしぐれ夕ぐれのそら　宗尊

碧玉　夜時雨
〔冬〕いくかへりあはれ雲路をおもひつゝへしや時雨をきく夜の枕ならん

雪玉　山時雨
〔冬〕みぬさとの山はしも見えず絶へ／＼て時雨つきぬる四方のうき雲

同　羇中時雨
〔冬〕袖はまだ志ぐれてゆくそ果乃みちをふる旅のまくらぬれてやらん

柏玉　河時雨
〔冬〕あれくだる時雨や関せ沢をう川かはもやまをも村しぐれかな

同　野時雨
〔冬〕そてゝ秋くれつきぬる村しぐれ杉の素して春ハかりけん

古今　袖時雨　躬恒
〔神〕神無月時雨にぬるゝもみぢ葉ハたゞわび人のたもとなりけり

玉葉　松風時雨　憲實
〔冬〕すぎぬれし山の木の葉ハちりはてゝ時雨をのこす峯の松風

同　泪時雨　公顯
をしみもみぢ葉ぞ秋のなごりとふるとてもしぐれとふるハ泪なりけり

（詞）△川音の時雨　川音をまがへるしぐれにきゝまがふこと　△袖時雨　なみだの袖にかゝるをいふ　△小夜時雨　さハ付字なり　夜のしぐれ　△村時雨　ひとしきりづつ降　むらがりふるをいふ　△小時雨　小の字をそへたる　△片時雨　一方ふれて一方ハふらぬをいふ　△泪時雨　なみだをしぐれ

△横時雨　風にさそはるゝしぐれ　△夕時雨

△松風時雨　松風をしぐれの音ときゝなすをいふ

△落葉時雨　おちしきる葉の落る音をしぐれといふ

○しぐれそゞろ。○しぐれの糸。○初しぐれ

(連)時雨にも遅日あるしぐれかな　宗砌

雲にはやたゞなかの世のしぐれかな　心敬

(俳)川音や時雨くだりの用舟　支考

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也　芭蕉

△**志まき**　時雨に風の交るを云。三冬にて雪にしまきの條にあるべし

(俳)あとくに傘持直すしまきかな　閣指

△**木枯**(こがらし)　△凩(こがらし)と云。木枯しの風と書り　秋を吹風にて木をからし落せしをいふ

冬には秋よりあり俳にハ冬の季とす

(俳)木枯しの身ハ竹斎に似たる哉　芭蕉

(哥)千載　ふしぐれにはげしさまさる木枯に　宿のまがきの風ひきなきぬ　定頼女

液雨(えきう)　○唐閣中の俗立冬の後十日を入液とす液となるは不成なり

△**初雪**(はつゆき)　△初雪の見参(けんざん)　△初雪の見参　○昔ハ初雪の降れバ殿中へ参られ御見参といふ事　○浅雪ハ初雪に同し　此外雪の字ハ三冬の部に出す

(哥)拾遺　ミやまでハめづらしとみる初雪ハ　よその山にふりやしぬらん　景時

新古今　つゆのよりもしのやれあさつまむ　夕べハ初しも川ぞふる　瞻西上人

(詞)ふりそむる。ひとへあつ。初雪見参。つもりもやらぬ。ふりもつゝかぬ。初雪ならぬ。松ぬめつらし

(連)初雪ハ庭ぞのちりもなし　宗祇

(俳)初雪にまた来ずら身の妻也　其角

初雪やいつもより庭ふみ見る　嵐雪

初雪や浪のとゞかぬ岩の上　淡々

めでたしな参内傘の初雪見　如水

初雪や木地挽く谷の夕網　紹簾

(詩)初雪詞

瓊林(ケイリン)瑶樹(ヨウジユ)忽珊々(タチマチサン〱)　急帯(ニオビテ)西風(ニ)下(ル)

晩天(ハンテン) タテノハヤシニタテノ木ガハヘタカト スレバキウ二西風ニツレテハツ ユキガフツテキタノジヤ

柳絮(リウジヨ)三冬ニ先北地(マヅホクチ)ニ ヤナギノワタガ冬ノウチカラキタグ ニニハヤウチルカ

梅花一夜遍南枝(アマネシ) ムメノハナガヒトヨサ ニミナミノエダニサキソロウタカト オモヘバハツユキガニツタノデアツタ

△初氷(はつごほり)

△初氷解(とけ)ハ氷のとけ要し 冬十三日なるべん

(哥) 千載 きのふこそ秋ハくれしかいつの間にいはまの水の薄氷すらん 公實

(俳) 行水の一夜とまりや初氷 里隠

初氷を鉛ハ志づめる松乃風 韓悪

(狂) よもの海底ふとみちの二三枚 むもびとするもかゞくの卵 貞史

△冬ざれ(ふゆざれ)

冬ざれハ冬しおれどいふ云之 冬ざれ枯さびしたるところにあそ

△冬籠(ふゆごもり)(三冬)

冬ハ草木ともに花もなく落て精気地中にこもる是を冬ごもりといふ

又一説ニ冬ニなれバ家の内ニこもりおることをもいふ之季ハ三冬ニしてよし

(哥) 雪ふれバ冬ごもりせる草も木も春ニ志られぬ花ぞ咲ぬる 貫之

詠 ひまもなく散る紅葉ふに埋まれて庭の冬ごもりなり 崇徳院御製

(俳) 金屏の松の古びや冬籠 芭蕉

武里ハ山陽にあり冬ごもり 支考

腰うしながまま仙人も冬ごもり 野水

冬籠りいらふて見る木の葉の 鶴十

冬籠り美人ニもあわぬく 馬行

冬籠り世界ほろぬ人となり 西鶴

△冬構(ふゆがまへ)

冬がまへハ冬になりてまくをもり炉をひらくなる事をして寒をふせぐ支度をする心之

(俳) 冬構へ外すも梅の愛すまへ 白扇

△閉北窓(きたまどをとづる)

北風ハきけしきりのあへ 北風をよけるま支度之

草木

此部ハ十月の草木を集む(三冬)と印るハ冬三月ニ景物ニ用ひてよし

△名草枯 △葛かるゝ △菊かるゝ
△荻かるゝ △萩かるゝ △薄かるゝ
△荻かるゝ △女郎花かるゝ △艸かるゝ
御傘に八花の字結べハ秋之と也り

㊒ 女郎花に尉もありて哀もあり 鬼貫
纓ふさちらしもた㊀え菊なかれ 言水

△冬椿 ㊂ △早咲椿 椿の花ハ春之冬開者を早開と名て人賞之といふ

△残菊 九月咲のこりたる菊なり

㊒ 夫木
秋さける菊にハあれど神無月しぐれに花の色ハ深ける 貫之

㊣ 一とせの花のかぎりを跡葉の代の粧ふど紛りまさるよ 舊徳

㊕ 残菊詞 唐大宗
細葉凋輕翠 團花飛碎黄
還將今歳色 復結後年芳
細カキ葉ガシボミナガラ青キイロアリ ハナノマルク咲タルモミダレ飛デ黄色ニミユルナリ コトシハコレガナゴリナレドモ又来年コノイロカヲモツテサケヨト心ニチギル

㊕ 残菊五字對句 同上
闌珊陶令宅 晩彫霜凛冽
サキミダレタルトウエイメイガイヘ 夕クレニ花ガシボムトミレバシモガワヨクオイタ
寂莫費公房 暁逐露離披
モノサビシイ費長房ノウチ 明ガタニデヽミレバツユガハラくトオイテアル

△冬牡丹 △寒牡丹 十月ころ花さく 十二月までもあり 大和本州より出たり

㊒ 雪中牡丹 元政
さくとてたふれハ雪つむ雪も添えて 九重たへしふ錦とてこそみれ

㊒ 重ね着て寒さ冬をも冬牡丹 一菊

㊣ さむそうな形りに咲ける寒牡丹 花の風気とひふべかりけり 麥峯

△石蕗花 ○石蕗とも書く ㊒ ちり穴に書の冬さんた大筆の花 右山

㊣ 口なしの色に咲しをいろうしてはなの花とハいすやみえん 烏貞

△冬菊 ㊂ △寒菊 ○多く花ハ一重と葉ゆそ赤を賞比 名 ㊒ 雪見艸

○秋無艸上同 ○霜見艸傳 ○莫のこり艸藻塩
○初見艸 蔵王よ出まうれども初見艸説多し寒艸の事之ともいふ

哥 夫木 式子内親王
むらゆきのうつろふやへのきくにまさる白きゝうハだにこそゆるしろ雪

蔵王 初見艸
三ぐれふる庭ふ冬ふしも初見艸花咲よ冬りをれや悲らん

連 寒さへぬ菊さく谷の南かな 宗碩

排 雪にわれ天寒の上ふ菊の杖 嵐雪
後敵のつよきみすかやすきの菊 梅翁
寒菊やはのふ只せてかきて参り 五流

狂 ふちて後紅葉のちらハちらしそてふるるよおこるうかん菊の花 嘉友

詩 寒菊七字對句 詩礎

顔色却因風露染 ガンショクカヘツテヨリテフウロニソム
ハナノイロハケツウニカゼヤツユデアカウソマツタ
愁雪葉 ウレフルユキヲハ
雪ライヤガル葉

英華不畏雪霜欺 エイクハズオソレセツサウノアザムクヲ
ハナブサハユキヤシモノアナドルヲモヲソレヌ
傲霜枝 ホコルシモニヱダ
シモニヨハラヌエダ

水仙花 千葉あり單葉あり一重の物花白く花心黄く

排 水仙ふおの月ハ床し障子紙 支考
水仙や一りと花と思ハすし 舊国

狂 竹えの三月心もかくやむゑつゆまおゝ水仙のちれ 計白

詩 水仙七字對句 詩礎

臺盞元非千葉種 タイサンモトヨリセンヨウノタネニアラズ
コノ水仙ノトトヘノハナハモトヨリセンヨウノタ子デハナイ
付雲來

羊容要是小蓮花 ホウヨウカナラズコレセウレンクハ
コノハナノカタチハカナラズコレチイサイレンゲトミエル
不染埃 ソマズチリ

八手の花 葉の岐七八あり形紅葉の葉ふ似て大ひなる姿なり
花白く小ちくして點實のるなり

排 つくばひふ八手の花や水まぶり 荷風

妙藥 おこりをふるふ人此木の葉を六字の名號をうきつゝのおとくせんじて數杯飲ハ忘ひろくしてたちどくく吐し忽ちおこりおつる

多く香むをよしとす。實を食ふべからず毒あり

△茶の花 白花之
(俳)菓の花や花も香旨の種なし　支考

(狂)花の香ハ茶ふよむずらん山吹のかしてぞ志るときく茶の花でと　貞木

△山茶花 南方草木状ニ曰山茶花數種あり。寶珠茶
○石榴茶 ○海榴茶 花の中ニ砕花あり
○躑躅茶 ○茉莉茶 ○宮粉茶
○串珠茶 皆粉紅色とあり 葉ハ各同じからずと云ふ是ふよりく見れバ今茶人あるの賞する數種のつばきなるべし季寄ふある春の部のつばきといへるハ海石榴之椿の字小充るハ誤なり

(俳)山茶花や敗をたく竹尾　鬼貫
山茶花や花るもひらら欲かるん　其角

(狂)つばきうもおもしかろちをうハそうとも淺ぢの山茶花のな　信面

△帰花。狂花といふ。へうまさき。梅。櫻。山吹なるのるい此月二三さく事ありまくまきときとあり尋常の花とハかじけく賞さるに足らん

(俳)凩よまてまていへバぬる　田井
參れの人もえへりなる　三惟

帰花故事

雅櫻宮

履中天皇三年冬十一月天皇池中に舟をうかへ皇妃とともに遊宴し膳臣酒を献る時櫻花杯中に落けり天皇これをあやしミ之ハ是花時ならぬにいづれの所より来るやとて物部長真膳連に勅ありて其花の来る所を求めしめたまへバ室山に得たり天皇其めづらしきをよろこびたまひて御宮の名を稚櫻と名付たまう是なへて花之 日本紀に出たり

△寒梅（かんばい）（十二）十月の季に入る。俳書も有。十二月にも委しく十二月に譜著

△枇杷の花（びはのはな）白き花にて八月より咲はじめ十月頃盛にて臘月までもある花也。葉ハ四季ともに散らず。実ハ五月なる。之花の頃より実の熟するまでの間九十日ばかりなる故自然とよく熟して味ひよし

(俳)脱肛の厠に枇杷の花見るや　亀貫
ふるされてにも無せし枇杷の花　紹簾

(狂)えりのすにいとをかけてぞびこの花ばらつくと散るがことし　遊野

△室の梅（むろのうめ）△室咲（むろざき）室の温氣をとうて早く未時花（ときならぬはな）をさかしむる

(俳)室とおて両ぞせるり花の匂　李四
三条の子れ子の紅や室の梅　林雨

△榧の花（かやのはな）木を烟（かまり）として蚊やりとする也。ふかやといふ。油をとる物ハいぬかやにて食にべからん。小木にてよく実を結ぶ

(俳)いつそもぬよしれぬ雪に榧の花　文甫
山より榧の花えんやらねの朝　山川

△散紅葉（ちりもみぢ）△紅葉散。紅葉散て物と染る冬こと御傘に出たり

(哥)古今　竜田川よりをるれば流るれく山のもみぢのおぞ今まさるらし
千載　綱ふかまさるまでそえしちども紅葉ちらしく吹川の実　頼政

(連)神無月ちるひのころ紅葉ふれ　肖柏
ちりちられ紅葉に吹ふけるいろへ心　宗碩

(俳)戸々を叩く音に無故の紅葉路　外
風の音せかて二枚を紅葉に　曲巴

(狂)ふしきそばちりしく庭の上にこそめるでおくふとろうやはじめれ　貞柳

△麦蒔（むぎまき）漢土ハ秋種を下せども本邦十月に下して四月黄熟（くわうじゆく）れ。是亦早中晩（わせなかておく）の異（い）有。日本後紀稱徳帝（しやうとくてい）大臣吉備（きび）に勅ありて天下の百姓に大小の麦を種しむといへども其時をうしなひ

て遂ニ不成其後嵯峨帝弘仁十一年冬嗣公に勅ありて今より八月に詩つくと是より時を不失といへり

(俳)夏痩やあきるゝ八月の一人之　朔平

枯蘆（かれあし）　三冬

(詩)には寒蘆といふ

(哥)新古今　西行
津の国の難波の春は夢なれや
葦の枯葉に風わたるなり

あさからぬなさけふかうしる難波江の
おとばかりしらぬ芦の村立　成通

難波がた汀の芦ハ霜がれてなだの
捨舟あらはれにけり　二條院讃岐

(詞)霜の下なる芦。風さやぐ。霜がれ芦。そよぶれ芦。霜のかれ芦。霜におれふす

(俳)ひまあれどさむくて人ハ良陽の芦　鬼貫

秋をおや芦よれちぎに浸つゝみ　支考

(狂)草も木もさらに変ずきぬきくの
稀ぎるおもしもかれ合ふなり　貞木

枯柳（かれやなぎ）　三冬

枯柳ハ冬の柳と同じ心にて柳のかれたるも枯枝もよめり

(哥)萬葉　霜がれのふゆの柳ハ見る
人のかつらにすべくもえにけるかな

(狂)あきれバ葉ハなし芽なし枯柳
旅人ひとりにて立てなるや　樂自

(俳)猿おとして立や枯柳　五樓

落葉（おちば）　三冬

諸木の葉風にちりしくを云。又木の葉ふりちる落る

もみぢいへり【立田川にも流もせきとめ
ばかりちりしぶれ枝ともいへり

(詩)落葉七字對句

風林脱葉山容瘦
霜稲登場野色寛
雪雲映月鱗々色
霜葉飛空戚々聲

(哥)秋あらてきふぐれゆきさえる山
中く風の音もきこへけれ　和泉式部

(連) 神無月この頃ほどは葉もなし　智蘊
後れぬ前にぞなん落る葉には　宗砌

(俳) 一葉ちりいくらもちりて目出度は　嵐雪
昔しはしや木の葉に割る角豆井　桃戸

(狂) 西風のさむい時にハ袷一衣どうな
かけ落葉と見ゆる天ヶ寺　徳府

△三冬

木の葉

△木葉舟　△木葉衣。木の葉ハ
つゞけ乍ら木よりおる葉とも
いへども和哥などにていふ事之俳の季ニ
出れバいちり落る木々の葉をいふなり
木葉衣ハ木の葉を衣にしてうるく
又仙人など木の葉を衣とする故事により
木葉舟ハ舟を一葉といへども立秋の條
に一葉舟の故事あり考合見るべし

△

木葉の雨

△木葉時雨。雨のふるごとく木葉のちるをいふ

(詩) 風吹枯木晴天雨　白氏文集
風ガ枯木ヲ吹ケバ晴タル空ニ雨ノフルヤウナ

(連) そめてちるも時雨の木葉かな　宗祇

(誹) 寒さある一葉ふるまで木葉の郷　芳室

(狂) 人ありて木の葉を金の事としてくハ
喰をハ月のめぐみなり　貞左

△

朽葉

木の葉の地上に落て朽ちたるをいふまた枝に有
ながら葉のくちたるをもいふ

(哥) 夫木　朽しまれぬ朽葉ハ下にうづもれて
まりて紅葉ふ吹やる庭の木がらし　為相

(俳) 撒もせで庭にきたる朽葉かな　矩州

(狂) ちるるもなくて朽葉の口惜や
口惜やしくて朽る葉もあり　舊徳

△三冬

蕪

又蕪菁ともいふ　(俳) 家々明寺
根のあらハなる蕪かな　鬼貫

(狂) あらくれてみれば世で世にもかぶ
かくれなき柿て嬉しくの蕪　貞室

△

大根

△大根引　△おほね引　△蘿蔔に似て根
大ゝ故大根といふ　(異名) 蘿蔔

(俳) 乙女が書くれにりの大根引　野坡
手は眺はまあるく腕のあかぎれ　宗離

冬木の櫻

冬咲くはなり　咲の花かはあれて

雪の下 花ハ四月ゟ鶺鴒と同物なるべし葉を冬も盛んに雪の下の名ふよつて季とす

柊の花 (圖)とげきハいらゝもきき秘蔵す出 いらとハ苛之棘に刺有故也

生類

此部ニハ十月一ヶ月の生類をあつめ出す

鶯子啼 (俳)人の子れなく啼よくきにはひある　湖中
(狂)なるハさすが法花のかさいちを子もよくきなくふ志ゆらしい事　井魚

必用

此部ニハ十月一ヶ月の天気の見やう其外必用の事をのせ

破軍向方

夜九ツ 巳ノ方	朝六ツ 辰ノ方	昼九ツ 未ノ方	暮六ツ 戌ノ方
夜八ツ 寅ノ方	朝五ツ 巳ノ方	昼八ツ 申ノ方	夜五ツ 亥ノ方
夜七ツ 卯ノ方	昼四ツ 午ノ方	昼七ツ 酉ノ方	夜四ツ 子ノ方

日刻 戌の日戌の刻亥の日亥の刻 事をなすに用ゆる事なるべき

出行作事 東方に向ひてよし 天道東ニ行月へ

樂事 小春の長閑なるに西と北ニ少し烘る日光に脊をさらして暖和を得るハかの負暄黄綿襖子と昔の詞もむべ瓶よ酒をあたゝめ獲酌あるハ對客炉辺のまどゐに風寒を忘ぎてハ春和ニも劣らず又枯枝にうり咲花のけしきもづらうあり

天氣 今月末よりの西風ハ十日もつゞきて大ニさけふある物也 西北の風ハ日和をつかさどる紫乃雲ふてバ大風ゝ戌亥の旦雲あれバ風生じ○雹あれバ大風あり○今月ハ雨の後ニ風吹く東南の風ハ久しうらじ

占候 虹あれバ不作ニて五穀貴し○初のきのえねにはふれバその冬大ふ寒し○十九日晴るれバ冬大ニあたゝかなる甲の日寒き

かゝざれバ暴死多し○東の雲たてバ王侯をしあり

養生

此月暖帽をいたゞく事なかれ脳を冷すべし賊暈の病なしみだりに針灸なすべからず血滋りて津液を亡す壓臥西方に向ふべしかならず房事をつゝしむ事をまもるべからず

衣服式

當月より綿入を着るべし
○移菊 表紫 裏青 ○黄紅葉 表黄 裏蘇芳

生花式正

○残菊○茶花○寒葵
○隈笹○霜がれ五葉
○寒竹○かしま松○唐松○大山橘
○つハの花○ゆづり葉
○此月紅柿の仕やう○梨みうたくはへやう○香の物漬やう秘傳ハ
ぞく○梔子○木芙蓉うへやう種蒔の品く其外當月用意の品
并ニ養生の仕やう等委しく日本歳時記知術全書等ニ出故略之

十月飲食并料理献立

禁物 山椒を多く食へバ血脉を破る○ふらふ食へバ痰多く出る○霜に枯たる菜を食へバ面のいろを損ずるとなり

好物 今月芋を食して益あり○雀肉冬三月これを食へバ陽道をおこし人をして子あらしむるなり

料理

汁 志らうみそ 煮ふけ かき せり

きうり房 つぶまわふけ 小まるゑ
小花えび まくらけ めノ皮

おいる やきふけ ゑうごぼう
やうれだゐ きくな ふきのとう
やれぶゐ せうれいく

清汁 きんこ 淡ねふけ こせう
かしき 牛房さゝがき せうが

膾 鯛・せんな 大こん くり せうが
きこご・あまのり 大こん・せうが くり・きんかん

すゞき細つくり
うど
木くらげ いり酒

ぼら ひら作り
生しやうが そへて
生くらげ

白うを・うど
生くらげ
梅仕立いり酒

なま子 ぎそうり
木くらげ
せり せうがかけ

差味（さしみ）

かれい・鯛・花がつを
あげ ... いり酒

ゑびき・ころが
木くらげ
みんだま

にがいうり むしき
せり・みんだま

鶏・生しいたけ
こうぐり
いり酒

かき 水とあがりて
大こん・いもくらけ
まんさいびまそ

煮物（にもの）

鴨・まいたけ
とうろふさ

唐
ひらたけ
粒ぶう

えぞうり身
柚ふけ・ぎろまよ
うすくづ 也

あるたき
ぎんなん・木くらげ
くづかけ こしよう

きんこ 細づくり
きすごむしぶ
ゆりね みどりなまう

おのしろ でこむして
よろきかづて
しれそそ

和會物（あへもの）

ぼうだら 也にして
せんごぼう
とうがらしそそ

さゞゐ・うど
さんせうそそ

いせゑび・生しいたけ
みぬきむ子
そそそ

たこ さんぎり
木くらげ
ささびまそ

ふしがい
ぎんなん
きさみ

吸物（すいもの）

ゆまて
大こん

しいたけ
きくな
ぎんなん

赤かい・葉せん根ぎ
かくしせうが

鴨
さんせう

かしいあぶらけ
さうり根ぎ
せうが

もうか
ゆきいびろづけ
ねぎふに

精進

汁

しろ ちく輪ぎんなん
せうろ
まくきる

生しいたけ
みがくろ

葉付かぶら
ほとふ根らけ

長いもせん
さつ丸

あげ人まん
かぶら
みかく

大こん 小角
おぼうせん

やきふ・
うさ

わり丸
ゆば

清汁（すまし）

ゆりね
かざなう

小椀ぶし
のりたまえ

実 くるを
みる

松茸
ぶん重

ゆ丸じ
さらせんじ
のり

膾（なます）

大こん・ちんじん
あげふ・生しいたけ
くり・せうが

ころがくきも
ごぼうせん
ゆば

十月

かうん菜・きくな・さといも
なのはな・らつきやう・たうがらし
まつたけ

差味（さしみ）
ぎおんぼう
まぐろ　ぶなます
あかがい　げいら
そう栗
せんごぼう
ゆで

煮物（にもの）
焙ふ
もみぢ
はす竹のこ
ひら茸・よめな
しめぢきけ

まぜくるみ
杭あげ
せり

みつば
椎のみ
あへ

うど
こんにやく
きくらげ

和會物（あへもの）
まぐろなし
ごまあへ

水菜うけ
にんじん
ごまあへ

吸物（すひもの）
むつのうけ
あぶら
しそ

よせぎんなん
くわゐ
こせう

時物

魚
うなぎ・かれい・かます・たら
さより・すずき・きすご

青物（あをもの）
かぶら・大こん・にんじん
ほうれん草・せり・くわゐ
きんかん・しそぼろ・牛房・めうど
わさび・ゆ・ざくろ
防風・さつまいも
ぎんなん・ぎおんぼう